

前期中間試験お疲れさまでした。同時に梅雨明けの時期になり、これから暑いとはいえ毎日雨のあのうっとうしさに悩まされなくなりそうです。今週末は4連休、8/7まで午前中授業、そして夏休み！ ようやくまとまった時間を確保して日ごろやりたかったことができそうです。

この夏の時間の楽しみに、図書館で自分と気の合いそうな本を探してみませんか。

①ぼくはイエローでホワイトで、

ちょっとブルー

レイディみかこ
新潮社
376/B1

②本を読むひと

アリス・フェルネ
新潮社
953/FE

③海苔と卵と朝めし

食いしん坊エッセイ傑作選

向田邦子
河出書房新社
914/MU

④美意識の値段

山口桂
集英社
707/YA

①ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー

レイディみかこ 376/B1 /1

去年も私はこの「図書ニュース」でいくつか愛読書を紹介したのだが、そのなかで『子どもたちの階級闘争—ブローケン・ブリテンの無料託児所から』という本をオススメした。その『子どもたちの～』の作者はレイディ・みかこ。今回紹介する『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』の作者でもある。『子どもたちの～』を図書ニュースで紹介した直後にこの本が出たときは運命かと思った。でも、調べてみたらそんなことではなく、ほかにもいろいろ書いている人だからであるようだ。でも、この本は発売前から楽しみにしていた。

彼女はイギリスで結婚して息子が一人いるのだが、その息子は親戚のすすめもあり、小学校までは地元のランキング1位のカトリック系公立小学校に通っていた。だが小学校の卒業間際、息子は地元の「元底辺中学校」である、多様な生徒の集まる中学校に進学することを希望する。そこで出会ったのは、小学校までの同級生のような恵まれた環境で生きる優等生ではなく、様々なしんどさを抱える同級生たちだった。また、彼はタイトルにもある通り父がアイルランド人、母が日本人の「イエローでホワイト」であるため、そのことで差別の対象になることもあった。だが、彼のすごいところは小学校の同級生たちが進んだ中学校に自分も進めばよかった…と変化を拒んで後悔するのではなく、新しい中学校でそこで生きる人々と付き合い、社会のリアルを見つめつつ人間関係を築いていったことだ。

読んでいくなかでイギリスの中学校（息子の中学校では新入生たちが入学早々みんなでミュージカルをする！）や社会の雰囲気を感じられるのもおもしろい。

そんなことを書いていたら、レイディみかこの最新刊が図書館に入りました！ 『ぼくはイエローでホワイトで…』の大成功のためか、この本も本屋で山積みになっていることが多く、表紙を見たことがある人も多いかもしれない。当然のことながら図書館には1冊しかないのでお早めに！

ワイルドサイドをほっつき歩け—ハマータウンのおっさんたち
レイディみかこ
筑摩書房
302/BR

②本を読むひと

アリス・フェルネ 953/FE

みなさんは「ジプシー」をご存じだろうか。日本にいと、ヨーロッパ旅行の際の注意として「スリ被害にあわないようジプシーには気を付けて」というような言い方で出てくることが多いと思

う。あと、もし知っていれば、ディズニー映画化もされた『ノートルダムの鐘』のヒロイン・エスメラルダもジプシーである。わたしはこのエスメラルダからジプシーに興味を持った。

ジプシーは現代においても自分たちの生活様式に誇りを持ち、それを崩そうとしないところがある。決まった住処を持たないことも多く、結婚はジプシー同士でして、子どもは学校に行かず家庭のなかでジプシーとしての教育を受ける。とにかくジプシーの者とのみ付き合い、それ以外の人間とは付き合おうとしないという。現在の社会ではそれで不利益を被ることも多いだろうに、なぜこの生活を続けるのだろうか？

この本はフランス、パリ郊外の話。ジプシーの大家族が暮らす、パリ郊外の、雨が降ればすぐにぬかるんでしまうような荒地地に駐車した車（このジプシー一家は車の中で生活していて、車を停めている荒地地も勝手に使っているものだ）に、エステールという名の図書館員の女性が訪ねてくる。ジプシー家系でないエステールは当然、ジプシー一家に警戒されてしまう。しかし、何度も何度も訪ねてくるエステールの熱意が勝ち、まずは子どもたちから、次第に大人たちもエステールの週一回の訪れを心待ちにするようになる。エステールがジプシーのもとを訪れるのは本の読み聞かせをするためである。文字を知らず、したがって本が一冊もないジプシーの車に、エステールは毎回さまざまな本を持ってきて読み聞かせをする。

読んでいて印象的なのは、ジプシーたちが「言葉を知らない」ということだ。フランス語が話せないということではなく、何かあったときに自分の中に沸き起こる感情を自分の言葉で表現することができないのだ（子どもだけでなく大人たちも）。次はどの本を読んでもらうかではじめ子どもたちにエステールは言葉で話し合うことを教える。「思い通りにならない怒り」も言葉にならないからこそ暴力やののしり言葉になって現れる。

かといってエステールの存在が一家を完全に変えた！。というハッピーエンドな物語でもない。しかし、一家にエステールの存在は確実に欠かせないものであり、そこにリアルさを感じてしまう。リアルなジプシーの生活がありありと感じられる。

③海苔と卵と朝めし 食いしん坊エッセイ傑作選 むらさき 向田邦子 914/MU

作者の向田邦子は、テレビ脚本家、エッセイスト、小説家といろいろな顔を持っているが、一番有名なのはテレビ脚本家としての仕事だろうか。『寺内貫太郎一家』『阿修羅のごとく』など、彼女の脚本のドラマは彼女の死後 30 年以上経った今でもときどきテレビで再放送されている。現在では中学校の教科書に彼女のエッセイが載っているのも、みなさん中学生時代に読んだことがあるのではないだろうか。

それは、ざっくり言うところの話である。戦争中、彼女の末の妹が地方に疎開することになった。末の妹はまだ字が書けなかったため、父は自分宛ての宛名を書いた葉書を大量に準備し、「元気な日はこの葉書にマルを書いて出すように」と言って持たせる。そう、『字のない葉書』である。妹からは、初日こそ葉書からはみ出すほど大きなマルの葉書が届いたものの、次の日からマルは急激に小さくなり、しまいにはバツになる。妹は病気で寝込んでいたのである。

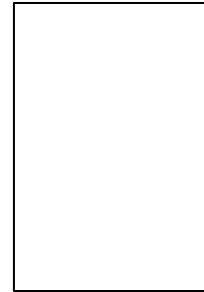
この話は私が中学生のころから教科書に載っていて、ひどく感動した私はもし幼い我が子がと離れ離れになるようなことがあったらこの手を使おうと脳内に秘蔵していたのだが、いつのまにか便利なものがたくさんでき、SNS 全盛の今、この字のない葉書作戦は使うことができそうにない

のが残念である。

向田邦子はエッセイの名手として知られ、様々なかたちで本になっているが、この本はそのエッセイのうち、「食べもの」をテーマにエッセイを集めたものである。彼女のすごさは、日常ごくありふれたものを彼女にしかできない角度から見て独自の切り取り方をするところだ、と私は思っているのだが、このエッセイ集でもその技は遺憾なく発揮されている。海苔巻きのはじっこが好きになったのも、これを読んだからだった。彼女が生きていた時代と今とでは、私たちの身の回りにあるものも様変わりしているので、なかなかイメージが湧かない箇所もあるかもしれないが、「おもしろい！」と思えるところを探して気楽に読んでみてほしい。

おまけ

向田邦子の愛読書でもある。



クレーの日記
パウル・クレー
新潮社
723/K3/2

古い本だが、クレーの日記としてはこの訳が一番だと思う（もうちょっと新しくて手に入りやすいものもあるのだが...）。こんなに古い本がすぐに読めるのも北野高校図書館のよいところ（ただし書庫の本）！。20世紀の美術界で独自の地位を築いたパウル・クレー。これは日記といえど、ただ毎日のことを記したのではなく、何度も手を入れて完成させた、いわばこれも一つの作品。詩的で幻想的な世界が味わえる。

④美意識の値段

山口桂 707/YA

美術品の値段とは、よくわからないものの代表ではないだろうか。「私でも描けそう」に途方もない金額がつけられていることもあるし、精巧で緻密に見えるものに案外価値がなかったりする。それを職業とする人々はどこに美を見出し、価値を判断しているのか。

作者は世界最大オークション・ハウスのひとつであるクリスティーズに入社して東洋美術を担当し、その後日本法人の社長まで務めた人であり、一流の美術品に囲まれて仕事をしている人である。その人が美とは何か、審美眼はどのように磨かれるのかを書いている、と聞けば読むしかないではないですか。

私が一番印象に残ったのは、彼の父が日本美術の教授で、息子を自分と同様日本美術史家にしたかった父から、彼はスパルタ教育を受けたというところだ。例えば NHK 大河ドラマは必ず父の隣で見なければならず、しかも放映中は父からの急な質問に答えなければならない。「関ヶ原の戦いで、西軍に付いた武将を三人言ってみろ」「三代將軍実朝を暗殺したのは誰だ？」……問題にこたえられないとひどくがっかりされたそう。そんな教育なら受けてみたかった。やはりある程度知っているところからしか興味も審美眼も出てこないのだという気がする。（しかし、こうしたあまりのスパルタ教育はやはり考え物だ。山口さんは一時期日本のものが大嫌いになった。だから大学は仏文科だったそう。）

肝心の審美眼の磨き方だが、やはり「とにかく良いものを見る」ことだそう。だが、ただ良いといわれるものを見ても自分の中で何が変化したのか分かりづらい。本書ではもうちょっと具体的に美術展や展覧会での「良いものの見方」にも触れている。人間には、美しい、とか凄い、といった人類共通の「感動の琴線」みたいなものが存在するのではないか。自分の中のその琴線の発掘の仕方が分かる。